

平成 25 年（第 2 期）事業報告書

（平成 25 年 1 月 1 日～12 月 31 日）

公益社団法人 国際 IC 日本協会

事業活動の概要

公益事業 1 国際会議の開催による国の健全な発展及び世界平和に資するための事業

実施期間：6 月 28 日（金）～30 日（日）

「調和 From Inner Harmony to Global Harmony」のテーマの下に開催された第 35 回 IC 国際会議は、日本在住の各国からの留学生等を合わせ 11 か国・地域の、小学 6 年生から 80 代までの 81 名が参加したが、特に多くの青年の参加があった。韓国から来日したチョン・ヨンヌク氏（IC 専従者）、学校訪問のメンバーだったチベットのジャヤン、ケニアのエスタ、インドネシアのヨーの 3 名が深い経験を話してくれた全体会議を始め、少人数でそれぞれの人生を語り合う『ファミリーグループ』の集まり、ゲームを通して文化や考え方の違いを学ぶセッション、各国の人たちの歌や踊りなどで盛り上がった『文化の夕べ』などに加え、自分自身を深く見つめるための『静かな時間』等でプログラムは構成された。参加者からは、「最初、会議の様子がよくわからなかったが、時が経つにつれ、全体のフレンドリーな雰囲気が気持ちをやわらげてくれた。国、年齢、業種、様々な『違い』を越えて心を寄せ合おう、そうすることで世界平和につなげていく・・・

という大きな主旨が最後にはわかり、すばらしい会議だなと思った」、「プログラムを大いに楽しんだが、もっとも意義深かったのは『ファミリーグループ』の集まりの時間だった。多様な背景と年齢を持った人たちのそれぞれの人生の話に耳を傾けるという体験はとても素晴らしいものだった」、「全てのプログラムが意義深かった



が、参加者個人の話聞き、文化の違いを学ぶことが、お互いを理解し、思いやることが何故難しいのかを如実に示してくれ、自分にとっては一番役立った」、「会議に参加した直後より、会議を終えた今、自分が少し良い人間になれた気がする」といった感想が述べられた。

公益事業 2 青少年の健全育成事業

ア. 学校訪問プログラム

実施期間：5 月 7 日～7 月 7 日

概要：今回は、IC の国際青年リーダー育成プログラム等の訓練を受けた、下記の 4 名が学校訪

間を行った。5月初旬に東京に集結し、チームづくりの後、約2ヶ月に亘り各地の小学校から大学まで35校を訪問し、58回のプレゼンテーションを行い、約5,000人の生徒・学生たちと交流を重ねた。交流会では各国の文化の紹介と共にICのメッセージを伝える歌や寸劇、そして各人のICを通じての学びの体験を披露した。



学校訪問参加者

1. ジャヤン・ドルジー (Mr. Jamyang Dorjee、チベット)

1988年にチベットで生まれる。8歳の時にヒマラヤを越えてインドに亡命。

インドでの高校3年生の際、生徒会会長と喧嘩をしたことにより、奨学金を取り消され退学処分となる。その2年後の2008年にインドICセンターのインターンとなる。そこでICの提唱する「静かに心の声に耳を傾けること」、を学んだことにより、自分を退学処分にし、恨みの気持ちを抱いていた高校の教師を訪ねて謝罪した。そのことをきっかけに人生の新しい展望が開けていった。現在は、ICの専従者として、やはりICの専従者をしている韓国人の夫人と共に、インドのICセンターで各国からのインターン生のコーディネーターを務めている。仏教徒。

2. ヨフリナ・ガルトム (Ms. Yofrina GULTOM、インドネシア)

1989年、インドネシアで生まれる。2011年にメダン国立大学を卒業。2009年から現在まで、国際教育センターで、英語教師を務めている。2011年にインドネシアで開かれたIC青年キャンプに参加。そこで、ICの唱える正直、純潔、無私、愛という4つの道德標準を学ぶ。それをきっかけに自分の不正直だった点や友人を無視したり、自分勝手だった点に気づき、自分を変え始めた。又、2012年に、日本で開催されたICアジア・太平洋青年会議に参加した。クリスチャン。

3. エスタ・カマウ (Ms. Esther KAMAU、ケニア)

1992年、ケニアで生まれる。現在、ケニアのナイロビ大学の学生(国際関係専攻)。祖父母がICの活動に係わっていたことから、ICを知った。赤十字のボランティアとして若い人たちが暴力に染まらないよう平和を説く活動に携わると共に、IC学生グループの会長も務めている。現在も叔父が熱心に取り組んでいるICの主導する選挙浄化運動も手伝ってきた。クリスチャン。

4. 森 ゆうき(日本)

1992年生まれ。2007年から2年半、カナダの高校に留学した後、2010年にはニュージーランドの高校に留学し卒業。現在は家庭教師のアルバイト等を行いながらNPO法人コモンビートやNGO法人ピースボートにも関わり活動中。又、2012年に、ICアジア・太平洋青年会議に参加した。近い将来、世界各国の学校に行き、日本のおもちゃを使って日本の遊びや文化を世界の子

供たちに伝えていくという夢を持っている。

(1) 東京での学校訪問

5月7日～18日 他

啓明学園（高等・初等・幼稚園）、大田区立道塚小学校、国際基督教大学（ICU）、杉並区立沓掛小学校を訪問し、プレゼンテーションを行ったり、意見交換をしたりと、いろいろな形で交流を行った。これらの訪問の合間にも、大学生を始めとした多くの青年たちとの個別のミーティングを持ち、相互理解を深めた。

「人はどんなに価値観や肌の色、性別等が違ってても、みんなが協力しよう、世界を変えようとする気持ちがあれば一つになることができるのだと感じた」等の感想が高校生から寄せられた。



(2) 静岡県での学校訪問

5月19日～24日

今年は昨年に次いで静岡県教育委員会の正式招請により2回目の訪問。県西部にある磐田市内の福田中学校・東部小学校の2校、湖西市の県立浜名特別支援学校、浜松市内の県立浜松湖南高校、富士宮市内の黒田小学校を訪問し、計8回の交流会を通じて合計1,423名の生徒達と濃密な交流を行った。交流会の様子は、地元の新聞にもそれぞれ取り上げられた。

特に今回初めて訪問した東部小学校は、全校生徒594名の内外国籍児童が56名（7%）と比較的多く、毎年この時期に行われる国際理解と交流をテーマとした全学年集会に特色を持たせ、力を注いでいる。今年は、この交流授業に今回のICの学校訪問が組み込まれ、担当教諭の指導の下5・6年生の国際交流クラブの準備委員約20名により綿密な計画準備がおこなれた。

IC訪問団の青年達の出身国（インドネシア・チベット・ケニア）に関する挨拶言葉や地理・国旗・食べ物などに関する自作のクイズを織り込んだ国際理解と交流の授業は、生徒達の心を捉え、最後に全校生徒による迫力に満ちた「ソーラン踊り」とIC青年達による軽快な「Jumbo」のリズムで頂点に達した。生徒達は、本物との「出会い」を通じて学ぶ、生きた学びの楽しさと、本物との「ふれあい」を通じて体験する交流の喜びを爆発させた。

教頭先生からは、「普段どちらかと言えば地味な、国際交流クラブの生徒が『こんな楽しい体験は初めて!』と満面に笑を浮かべながら感想を語ってくれた」と報告してくれた。

いずれの訪問校にも県教育委員会からスタッフの派遣があり、生徒達との交流の前後には、校長先生や主担当の先生方との交流の時間を持ち、来日目的やICでの体験を伝えると共に各学校に於ける重点教育活動について伺い、日本社会に関する見聞を深める一助になった。

(3) 小田原市での学校訪問

5月25日～31日

小田原市教育委員会の仲介により、今年は小田原市立国府津小・千代小・下中小・早川小・新玉小・富士見小・下府中小・三の丸小の計8校を回り、15回の交流会を実施し合計1,059名の児童と直接に交流を行った。また、小田原でも各学校では生徒達との交流会の前後に、

教育委員から派遣のスタッフも同席して校長先生や主担当の先生方との交流の時間を持ったが、あるベテランの校長先生からは、参加している IC の青年訪問者 4 名について、それぞれの個性・特技を描写された後、この学校訪問プログラムの特徴について、「それぞれにユニークな個性を持つ四人が、まとまった一つのチームとして活動するモデルを生徒達に示していることがすばらしい」という見方を披露された。

これに加え、大野速雄副市長を表敬訪問し、学校教育課長・教育主事 2 人の同席のもと、それぞれの活動紹介と共に生徒との交流を通して感想を語ったところ、大野副市長は、「あなた方の確信に満ちた目をみて、自分の若い頃の熱い思いが蘇った。是非、その志を大切に今後共持続してほしい。一人でも多く共感する日本の若者が出ることを希望する」と語られた。

また、小田原では今年も 5 家族のホストファミリー宅に滞在し日本の生活文化を体験する事ができた。1 週間の滞在中最後の夜は、小田原サークルの主催による「ホストファミリーへの感謝の夕べ」で体験を分かち合い心の交流を図った。

さらにまた、東京に戻る日の午前中、二宮尊徳を祀る報徳二宮神社と報徳博物館で日本文化と尊徳思想に触れると共に、草山明久宮司よりご自身の報徳思想の実践例として、東日本大震災後の復興支援活動の事例と地場産のみかん農家との協働による新製品の開発・販売事例について学ぶ機会を得た。

(4) 福島での学校訪問

福島大学で東日本大震災からの復興ボランティア活動に取り組む学生たちとの交流が行われた。翌日には、学生の案内で未だに大きな被害の残る南相馬市を視察した。

(5) 福岡県、佐賀県での学校訪問

10 月 23 日～31 日

最初に訪れた北九州市では、今回も小倉東ライオンズクラブの全面的な支援を受け、北九州市教育委員会を通じてアレンジされた、市立沼中、市立長行小、北九州特別支援学校、市立吉田小学校を訪れ、児童・学生たちに国際理解を深め、より良いコミュニケーションを図るためのプレゼンテーションを実施した。又、小倉東ライオンズクラブの例会にも招かれ、学校訪問でのプレゼンテーションの内容について説明・報告を行った。



「初めての体験が生徒には刺激的だったようだ。人と関わることの良さを再発見したように思う。『またしたい』と翌日、口々に言っていた」という先生の感想も寄せられた。

引き続き、福岡市では、中村学園大学、香蘭女子短期大学、ILP お茶の水医療福祉専門学校に加え、筑紫女学園大学を訪れた。それぞれの国の文化紹介はもとより、“自分の家族や周りの人々との人間関係をどのように向上させられるか”、“こうありたいと願う自分の妨げになっているものがあるか考えてみよう”など、ワークショップや寸劇、メッセージソング、又、それぞれの体験を分かち合うことを通して、学生たちに考える機会を提供した。「国際 IC の

『一人ひとりのチェンジで信頼を』の言葉どおり、私一人の変化で世界が大きく変わるわけではないが、一人一人の変化が積み重なって交わり、世界が大きく変わる力になるような気がする」、「今後自分はどうしたいのか、何が必要なのか、また何が足りないのか、何が障害になっているのかなど、自ら考えることができた」等の大学生の感想が寄せられた。

又、昨年に続き佐賀県の西九州大学を訪れ交流した他、弘学館中学を訪れプレゼンテーションを行った。『授業では学べないことを学べた』、『どうすれば周りの人を楽しくさせることができるか考えさせられた』等の感想が生徒たちからあり、精神的にも知的にも大きな影響を受けたようだ」との先生からのコメントが寄せられた。

(6) 広島訪問

6月20日～21日

広島修道大学をおとずれ、アメリカ、オーストラリア等からの留学生、そして日本の学生たちと交流した。また、広島平和記念資料館を見学し、改めて平和の尊さを実感した。

(7) 名古屋・岐阜訪問

6月22日～26日

今回は名古屋市内の私立幼稚園1校と公立小学校1校にそれぞれ初めて訪問した。その他、大垣市内のHiro学園は一昨年に次いで、恵那市内の市立大井第二小学校は昨年に次いで2回目の訪問である。今年初めて訪問した名古屋市内の私立幼稚園ゼンヌでは3・4・5才児195名と交流を持った。園児たちは、「ソーラン踊り」で精一杯に歓迎してくれた。彼らとのハイタッチの交流の思い出が、彼らの胸中で大きく成長することを期待した。次いで、在日ブラジル人が主体のインターナショナルスクールであるHiro学園（在日ブラジル人学校）を訪問し、8・9年生35名の生徒達と交流を持った。生徒達は好奇心いっぱいのように映った。他に、9年生の3クラスを訪問し、短時間の交流ながら、世の中をよくするには、一人一人が大切で「自分から始める」ことが重要である旨のメッセージを伝えた。次いで、今年初めて名古屋市内の市立名北小学校を訪問し、3年生3クラスの85名とクラス毎の交流会を持った。生徒の反応は良く、先生方も熱心で好意的である。また、昨年に続き恵那市の大井第二小学校を訪問し、今年は2年生・5年生・6年生3クラスと夫々学年別に3回の交流会を持った。今春着任した校長先生は大変熱心で、3回とも具に交流会の様子を観察された。

(8) つくば市訪問

7月2日～3日

今回は、つくば市立上郷小学校に加え、沼崎小学校、今鹿島小学校も訪れた。「3か国の文化や習慣について話を聞き、もっとくわしく知りたいという気持ちをもった児童が多かった」との先生のコメントがあった。

(9) 日本への理解の深まり

東京での滞在を振り出しに、静岡・小田原・福岡・佐賀・広島・名古屋・岐阜・つくば市への訪問・滞在、更には鎌倉等への訪問を通して、日本の多くの伝統文化にも触れた他、福島では東日本大震災の現在も続く影響とその中での復興への様々な取組についても理解を深めた。又、日本の家庭でのホームステイの体験は、日本人の日常生活や生活文化への理解を深める助けとなった。3名の海外からのボランティアも、それぞれ多くの親しい日本人の友人たちを作り、帰国後もそれぞれの国と日本の良き架け橋となっている。

イ. インターンシップ・プログラム

< 招聘プログラム >

被招聘者の都合が付かなくなり招聘を中止した。

公益事業 3 個人と家庭の健全な発展に資するための事業

ア. IC セミナー

【概要】忙しい毎日の中で時には立ち止まって、自分の心のありようをみつめることが必要とされる。心を開いて、人の話に耳を傾け、自分の人生を語ることにより、自分の人生で直面している課題を整理し、前に向かうことができる。この IC セミナーは、生きる力の源となる心を育て合う場となることを目指して開催されている。

(1) IC セミナー (唐津シーサイドホテル)

3月2日～3日

中日本高速道路㈱顧問を務める矢野弘典国際 IC 日本協会会長 (テーマ「経営とリーダーシップ」)、指宿ロイヤルホテルの有村桂子会長 (テーマ「覚悟の経営」)、元西日本銀行の役員の川辺康晴氏 (テーマ「今、なぜアライアンスか?」) による講演を始め、小さなグループに分かれてお互いの人生を語り合うストーリー・テリング、パネル・ディスカッション等のプログラム内容で開催された。参加者からは、「心に残る話ばかりだった。今出来ることを少しずつ、今の私に出来ることを実行して行きたい」等の感想が寄せられた。63名が参加。

(2) IC セミナー (富士箱根ゲストハウス)

10月5日～6日

『自分の人生の目標を確認しよう』のテーマの下、富士箱根ゲストハウスで開催された IC セミナーには中国とマレーシアからの留学生、そして、小学生や家族での参加者を含む 11 名が参加した。様々な世代から成る参加者は、家庭的な雰囲気の中で、それぞれの人生を振り返り何を大切に生きていくべきか等を語り合った。参加者からは、「普段あまり深く考えない点についてじっくり考える時間を与えられた」等の感想が寄せられた。

イ. ファミリー・ワークショップ

今期は開催せず。

ウ. 各種交流会

概要：アジアの人々を始め、各国の人々との相互理解と信頼を深めるために留学生や在日外国人を交えた勉強会や交流会等を行う。又、IC の精神やその実践による体験等を分かち合うことにより学び合う。

(1) IC 交流会 次のテーマ及び日程で開催された。

①「内なる心の調和をもたらすために①」	4月7日	11名
②「身近なコミュニティに調和をもたらすために①」	4月21日	15名
③「日本の社会や世界に調和をもたらすために①」	5月5日	5名

④「内なる心の調和をもたらすために②」	5月19日	10名
⑤「身近なコミュニティに調和をもたらすために②」	6月2日	6名
⑥「日本の社会や世界に調和をもたらすために②」	6月16日	9名
(以上は、IC国際フォーラムの事前勉強会を兼ねて開催)		
⑦「ICの今後の活動について」	7月21日	17名
⑧「第10回東北アジア青年フォーラム、コー世界大会等への参加報告」	9月15日	26名
⑨「マレーシアを知ろう」他	10月20日	18名
⑩「インドCIB国際会議報告」他	11月17日	17名
⑪「今年、有難いと感じたことについて」	12月15日	21名

公益事業4 国際相互理解と友好を促進するための共同事業

ア. 第10回東北アジア（日中韓）青年フォーラム

8月12日～17日

韓国MRA/ICの主催の第10回東北アジア（日中韓）青年フォーラムが、韓国政府女性家族部の後援を受けて、『青少年のための韓・中・日の進路教育を考える』のテーマの下に開催された。日本からは、大阪府立、学習院、関西学院、慶応義塾、上智、中央、筑波、津田塾、東京、東京学芸、横浜国立、横浜市立、立命館の計13大学から19名が参加し、中国からの24名、韓国からの30名の学生たちと熱心に交流を行い、参加者同士に深い友情が築かれた。日本の参加者からは、「これまで、あまり韓国、中国に対してよいイメージを持つことが出来ていなかったが、今回の滞在を通してそのイメージが覆っただけではなく、これからの日中韓の関係の更なる向上を期待することが出来た」、「これほど短期間でお互いに親密になれるとは思っていなかった」等の感想が寄せられた。



イ. スイス・コー国際会議

8月7日～12日

今回も『人間の安全保障のためのコー・イニシアティブス』という総合テーマの下、6月29日から8月12日まで7つのテーマで国際会議が開催され世界中から参加者が集まった。日本からは、8月7日から12日まで開催された、『より良い世界のために—一人ひとりのチャレンジのためのインスピレーションを求めて』のテーマの会議に10名が参加した。日本の参加者から、東日本大震災を通しての経験等が語られ大きな反響を得た。

ウ. 日中相互訪問プログラム

今回は実施せず。

エ. インド IC との共催のコー・イニシアティブス・フォー・ビジネス (CIB) 会議

11月7日～11日

2007年以來、日本とインドの IC 協会は隔年でインドの IC センター「アジアプラトール」で持続可能な社会の創造をテーマに会議を開催してきた。2013年は、11月7日から10日にかけて第4回 CIB 国際会議が、「経済成長を持続可能で人にやさしいものにするために—その課題と可能性を探る」のテーマで開催された。日印を始め、東アジア、東南アジア、中近東、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカの計20か国・地域から218名が参加した。日本からは、ANA ホールディングス、スズキ、損害保険ジャパン、東芝、中日本高速道路、横河電機、ユー円卓会議日本委員会



の代表を始め、静岡県の川勝平太知事とスタッフ等、計20名が参加した。インドからは、タタグループの会社の役員等多くの参加者があったが、その一人、タタ製鉄のムスラマン副会長は、「企業とは人々の幸福のため、社会の人々のためにあるべき、利益のみ追うのはいけない。企業が利益の総額だけで評価されるようになれば利潤追求だけに走る。公平なビジネスを通じて、社会に不正がおこらないようにする必要がある」と述べた。又、日本の矢野弘典 IC 協会会長のビジネスリーダーとしての、「まず良い会社となり、強い会社となること、その順番を変えてはいけない」等の体験に裏打ちされた話が共感された。日本のビジネスマンの参加者からは、



「朝のプログラム、とりわけ『Inner Governance (内なる統治)』は自分自身を見つめなおす良い機会だった」、「企業家、政治家、役人、活動家など、様々な立場の方々から、違った角度で、CSRに関する話をたくさん聞くことが出来た」、「自分のコアバリューとは何か？この答えを会議を通じ常に意識させられた。相手を思いやる心？相手を尊重する謙虚さ？武士道精神？などいろいろ考えさせられた」、「違った切り

口や目線で、物事を、業務を捉えることを学んだ。企業で働く者として、利潤の追求は当たり前のことだが、利潤を超えたものを追及するんだという会議を通して一貫したテーマには、感銘を受けた」等の感想が寄せられた。又、静岡県の川勝知事は、「富国有徳とふじのくにづくり」のテーマで講演を行うと共に、ラジモハン・ガンジー教授を始め多くのインドの参加者たちとの交流を深めた。

この会議を更に発展させていくために、参加各国からのアクションプランも発表された。桜プロジェクトとして、IC センターの日本庭園に桜を植えることを目指して調査を重ねたが、気候の関係でうまく根付かないということが判明した。今回はそれに代えて唐津焼の赤富士桜

の陶器を日本の IC 協会から持参し寄贈した。又、桜に代えて他の植物を選び、又、適当な石等も配置し日本庭園らしくしていけるように引き続き協力していくことが申し合わされた。

オ. 第19回アジア・太平洋青年会議 (APYC)

8月17日～24日

第19回アジア・太平洋青年会議が北朝鮮と国境を間近にする、韓国の DMZ Peace-Life Valley (非武装地帯 平和-生命の谷 センター) で開催された。『より良い未来のために共に行動を



Common Action for a Better Future』のテーマでのこの会議には、アフガニスタン、ブータ

ン等、14か国・地域から60余名が集まったが、日本からは、大学生・社会人から成る8名の代表が参加した。1週間に亘ったプログラムでは、朝は自らの心の声に耳を傾けるセッション



から始まった。その他にも、「人間関係や国と国との関係」、「平和と命」、「持続可能な社会にす

るための生き方 (環境問題)」、「民主主義と各国の問題点」等を講師の講演を聞き考えた全体会

議も開かれた。又、小さなグループに分かれて深い話し合いを行った「ファミリーグループ」は、国や人種の壁を越えて、本当の家族になったかのような深い絆を生んだ。その他にも、「リーダーシップ」、「ダンス」、「韓国伝統文化」、「ゲーム」、「歌」、「アート」等、様々なことを学べるワークショップへの参加、ゲームや各国の文化紹介の夕べ、キャンプファイヤー、など楽しいプログラムも多数用意された。参加者からは、「家族に愛と感謝の気持ちを伝える」、「無視していた親せきの人に謝る決心をした」、「差別等難しいこともあったが、自分たち中国人をフィリピンの人たちは寛大に受け入れてくれた。中国人とフィリピン人の過去の傷を癒したい」といった決意が述べられた。又、日本の参加者と韓国や中国や台湾の参加者との率直な話し合いに刺激され、カンボジアの人たちが隣国ベトナムの参加者たちと真摯に話し合うということも起きた。カンボジアの青年は、「ベトナムを憎んでいた人間が、この1週間の APYC でベトナム人の友人を作り変わる事ができた。歴史を学び合い率直に話し合うことが本当に大切だと実感した」と話した。1週間の APYC の終わりには参加者が文字通り一つのワールド・ファミリーになったような深い連帯感が生まれた。



公益事業 5 機関紙等の発行による啓発事業

機関紙「IC たより」の編集を進め、2回発行した。

以上